



白神山地だより

ビジターセンター



命をつなぐ世界自然遺産「白神山地」

白神山地ビジターセンター 館長 相馬 光春

1. はじめに

新春とは申しながらまだまだ厳しい寒さが続いておりますが、皆様方にはいかがお過ごしでしょうか。当センターから眺める山里の風景は純白一色となっております。

さて、今回発行のセンターだより 2017 冬号は、2001年夏号の発刊以来、30 回目の節目となります。これも偏に関係各位のご協力の賜と深謝致しております。

当センターでは、来シーズンに向けてセンター行事など、その実施内容に検証を加え、利用者、参加者の視点にたち、更なる充実を図って開催事業を実施しますので、多くの方々に白神山地の魅力を体験していただきたいと思っております。

本号では、命をつなぐ世界自然遺産「白神山地」について述べます。

2. 世界遺産登録以前

白神山地はユネスコの世界遺産条約の自然遺産に登録されたことで一躍有名になりました。今では小学校の教科書にも取り上げられ、テレビや雑誌などでも特集されることがたびたびあります。

しかし、世界自然遺産に登録される以前は有名どころか、世間にはまったく知られていなかった山地でした。と言うより、地元でも使われていなかった山地名でした。

地元や行政関係者の間では「弘西山地」と呼ばれていました。津軽地方の中心地弘前の「弘」と「津軽西海岸」、昔は「西浜」と呼んでいた、その「西」をとって、「弘西山地」と呼んでいました。

それが、なぜ、白神山地と呼ばれるようになったかと言えば、今から三十数年前、この山地でブナ林

伐採を目的とした林道建設工事が計画され、自然破壊の危機にさらされた時期がありました。

この林道建設に対して反対運動が起こり、その反対運動の人たちが白神山地と言いはじめた、という経緯があります。

反対運動は時流も味方し、山地のブナの森の自然は守られ、その結果、世界自然遺産になり現在に至っています。

3. 白神山地の範囲と世界遺産



白神山地は、青森県南西部から秋田県北西部にまたがる約130,000ヘクタールに及ぶ山地の総称です。

この中で最も自然度の高い 16,971 ヘクタールが、「陸上・淡水域・沿岸・海洋の生態系や動植物群集の進化、発展において、重要な進行中の生態学的過程又は生物学的過程を代表する顕著な例」という基準を満たすということ、すなわち世界でも類を見ない規模で、広大でかつ連続した原生に近いブナ林が存在しているということで、1993年（平成5年）12月、鹿児島島の屋久島とともに、日本初の世界自然遺産

として登録されました。

世界遺産は人類共通の次世代に守り伝える遺産ということですが、当然ながら、それなりの守られるべき価値がなければなりません。「普遍的価値」という言葉が使われています。

では、白神山地の普遍的価値というのはなにか、と言いますと、ほとんどのブナ林は、人間活動の悠久の歴史のなかで伐採され続けられたが、白神山地のブナの森は世界最大級の面積で、かつ原始的な自然環境で残っている。つまり、「かつて広く覆っていた冷温帯のブナ林最後の遺存地」という「普遍性」を価値としています。



白神山地

白神山地は標高 1,000 メートル前後の山々がびっしり連なっています。山があるわけですから当然、川もその間に血脈のように複雑に入り組んで流れています。

4. 山地の生い立ち

白神山地の地質は、主として 9000 万年前（中生代白亜紀）にできた花崗岩類が基盤となっています。その時代、日本列島はまだ姿を現しておらずユーラシア大陸の一部でした。

この古い地層を除けば、山地の大部分は 2000 万年から 1200 万年頃（新生代第三紀中新世）にかけて海底の火山活動などでできた堆積岩（凝灰岩、泥岩、砂岩）と貫入岩類（流紋岩、石英閃緑岩等）で構成されています。

この時代、白神山地は日本海の海底にありました。白神山地の誕生は、今から 500 万年から 400 万年前頃、褶曲や逆断層による海底地層の隆起に始まります。その隆起の速さは年間 1.2 ミリメートルと見積もられ、日本では隆起のスピードが速い地域となっています。

数百万年前まで海底にあった地層が、十分に固まることなく急激に隆起したため、もろく崩れやすい性質を持っています。



向白神岳

5. ブナ林の生い立ち

白神山地の大部分はブナ林で覆われています。ブナの仲間は世界で約 11 種類あって、そのすべてが北半球に分布しています。日本にはブナとイヌブナの 2 種類あって、日本固有の植物となっています。

冷温帯を代表するブナは、日本海側の積雪地帯を中心に分布しており、南限は九州鹿児島県大隅半島の高隅山の海拔 1000 メートル付近、北海道道南後志の黒松内の平地のブナ林が北限となっています。

最後の氷河期が終わったのは 1 万年ほど前、それから 2000 年後、白神山地にブナ林が誕生し、今日までずっとブナ林が続いています。



ブナ林

6. いのち輝くブナの森

世界最大級のブナの森のなかでは、さまざまな生命が育まれています。山地に生えている植物の種類は 540 種を超えることがわかっています。

そのなかには 100 種を超える保護されるべき植物が見られます。どれも白神山地を代表する植物ですが、ここでは次の三つの植物を紹介します。

山地の四カ所しか生えていないナデシコ科の新種アオモリマンデマ



青森県で初めて見つかったベンケイソウ科のツガルミセバヤ



文字通り山地の固有種でゴマノハグサ科のシラガミクワガタ



山地には土の中に住む下等な動物から哺乳類までさまざまな動物が生きていますが、まだ調べられていないグループもあります。

哺乳類ではツキノワグマ、ニホンカモシカ、ニホンザルを初めとし、ネズミの仲間4種類やコウモリの仲間12種類、ムササビの仲間2種類などが確認されています。



ニホンカモシカ

トカゲやヘビの仲間のは虫類は7種類、サンショウウオやカエルの仲間の両生類では13種類が確認されています。

鳥類は89種類が確認されており、森林性や渓流性の鳥が多いと言われます。なかでも、日本の森林生態系で食物連鎖の頂点に位置するワシタカ類のイヌワシやクマタカが複数のつがいで生活していることが確認されています。

これらの鳥が生活するには広大なテリトリーを必要とするが、それを支えることができる食物が豊かであることの証です。

また、山地保護のシンボルとなったクマゲラは日本最大のキツツキで、秋田県の森吉山とともに本州では2カ所しか営巣が確認されていません。シノリガモは冬に姿を見せる海のカモとされていて、繁殖地は不明でしたが、山地の赤石川源流で夏に繁殖

していることが初めて発見された鳥です。

昆虫類は動物の中で最も種類数が多いグループです。山地でもこれまでに約2,300種以上がわかっていますが、調査



イヌワシ

するたびに増えています。中でも甲虫が多く次にチョウ・ガの仲間、カメムシの仲間が続きます。昆虫の中には、山地で発見された新種の昆虫、シモヤマミズギワゴミムシ、シラカミナガチビゴミムシ、オロプレムス・ヤマウチイ（学名）など7種類があります。

この他に魚類2種、アリ類29種、土壌中のミミズの仲間やササラダニ、ヤスデの仲間、センチュウの仲間などが確認されています。



自然界は一見残酷にも思うが弱肉強食の世界なのです。植物は太陽のエネルギーを利用して有機物を作って生きている。しかし、動物は自身で有機物を作れないため植物や他の動物を食べることで生きています。こうした「いのちのつながり」を食物連鎖と言います。

ほとんどが落葉広葉樹で占められている山地のブナ林は、ブナやミズナラ、サウグルミ、イタヤカエデなどの実をはじめとし、動物たちの食べ物も豊かです。栄養分の高いブナの実、ツキノワグマやニホンザルにとって欠かせない食物となっています。アリの仲間のムネアカオオアリはクマゲラの好物です。イヌワシはノウサギやヘビ、ネズミなどを食べます。ヘビはカエルや小鳥のヒナや卵などを、ネズミはブナやミズナラなどの実を食べています。こうして、森の生き物たちは植物から、あるいは枯れた木や葉から虫や鳥に至るまで、おたがいに関係しながら食物でいのちが繋がっています。

こうした山地の森林生態系は、ブナ林が誕生した約8000年前から進化しながら純度の高い状態で現在も進行していると言われています。

7. 山地と人とのつながり—文化と歴史—

これまで話したように縄文の昔から人々がかかわってきたのが白神山地のブナ林の自然なのです。

今でこそ、遺産地域の核心部のブナ林は原生的な風情を見せていますが、人々は縦横に山々に分け入って、狩猟なり山菜などの採集なりをしていたのです。当然、奥山にも足を運んだことでしょう。

こうした営みは時代が変わっても今日まで続いてきたものと思われま。それでいて自然が破壊されることがなかったからこそ世界自然遺産として現在に残されている、ということだと思えます。

人々のそうした営みの痕跡が森の中でいろいろ見ることができます。人為によって植物相の改変をもたらした例としてはオオバコやヨモギ、ハコベなど多種多様な草花があり、今では日本的な風景の一部を形づくるものとなっていますが、白神山地の奥山にも人々が分け入った証として繁茂しています。これらは史前帰化植物と呼ばれて、日本にコメやムギが入ってきたのと一緒に大陸から運ばれてきた植物で、路上植物ともいわれて人々の往来する場所に、履物などに付着して分布します。白神山地の奥地の溪流沿いや尾根筋などで見かけますが、昔から人々が入り出したことを物語っているわけです。

藩政時代につくられた地図を見ても、奥山の一本一本の沢に名前が記されています。山や沢や滝に名前をつけなければならぬ必然性があったのだと思えます。

最後の津軽マタギの
一人とされる
鈴木忠勝氏
(1907～1990年)



例えば、マタギの間では近寄ってはいけないとされている場所があります。そこへ逃げ込んだ獲物は、深追いされることもなく生き延びられることとなります。結果的には、これによって種の保存にもつながるわけです。

1955年頃までの地図には白神山地の名前は載っ

ていませんでしたが、白神山地の暗門の滝を訪れて描いた絵と木こり達の様子が記録(1796年)として、江戸時代後期の旅行家であり博物学者であった菅江真澄によって残されています。また、幕末から明治初期にかけて弘前を代表する日本画家であり国学者でもあった平尾魯仙は、画集「暗門山水観」に暗門周辺での林業についての絵を遺しています。



暗門山水観の図

8. おわりに

地球温暖化問題は、全世界規模で憂慮すべき大きな問題となっています。人間活動により、二酸化炭素が増え、温室効果で地球が暖かくなっており、21世紀末には年平均気温が1.1度から6.4度上昇するとも言われています。

また、地球の砂漠化や南極、北極大陸の氷山が溶け出したり、海面の上昇や南極上空にオゾンホールができたりなど、地球は過去の気候変化に比べ、現在の変化はけた違いに速く進行しています。

白神山地でも、このまま温暖化が進行すると、わずか100年以内にブナ生育適地がほぼ失われるという予測も発表されています。いづれにしても、今後、白神山地のブナ林生態系が大きく変貌することになるでしょう。

最後になりますが、自然は人間社会と異なり、多種多様な社会です。植物や動物にしても地勢や地形に適合して生活しています。私たち人間のようには環境を自分に合わせて改変することはできません。人間だけが自分たちの合理的な規範に自然を取り込もうとしているように思えます。

白神山地ビジターセンター

〒036-1411 青森県中津軽郡西目屋村大字田代字神田61-1

Tel.0172-85-2810 Fax.0172-85-2833 ホームページ <http://www.shirakami-visitor.jp/>

■ 上映開始時間(映写時間は約33分です)

4月1日～10月31日

第1回 9:00 第2回 10:00 第3回 11:00 第4回 12:00

第5回 13:00 第6回 14:00 第7回 15:00 第8回 16:00

11月1日～3月31日

第1回 9:30 第2回 10:30 第3回 11:30 第4回 12:30

第5回 13:30 第6回 14:30 第7回 15:30

観客席195席 ※上映中の入・退場は、お断りしております。

開館時間

8:30～17:00(4月1日～10月31日)

9:00～16:30(11月1日～3月31日)

休館日

4月～12月 第2月曜日

1月～3月 毎週月曜日と木曜日

※祝日の場合は翌日

年末年始 12月29日～1月3日

入館料

無料

映像観覧料

大人/200円

小人/100円(中学生以下)

20名様以上で団体割引の適用により上記料金の2割引きとなります。

※観客席は195席で先着順となります。